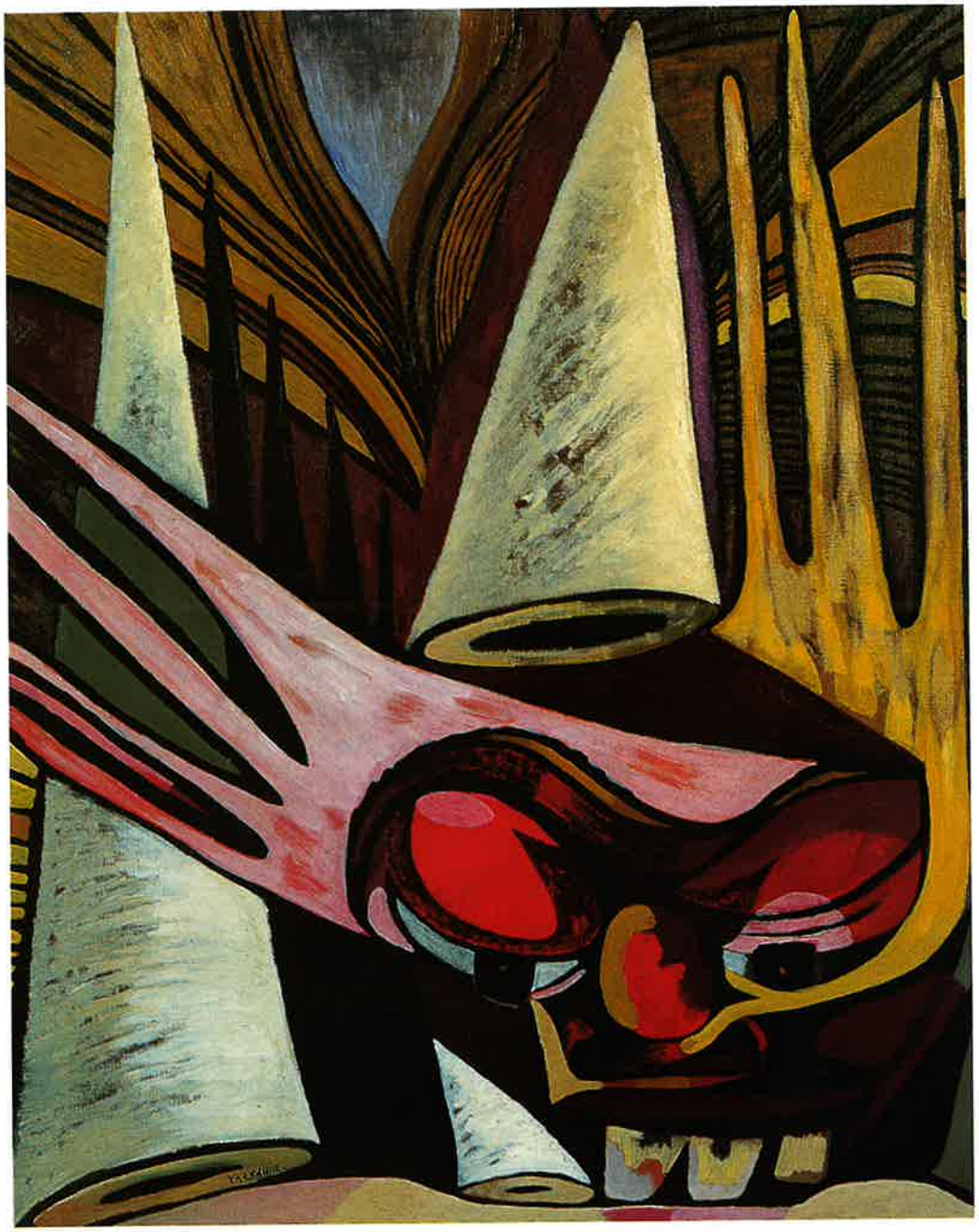
天花
TENGE

山口県立美術館ニュース

第64号

平成8年3月31日
発行山口県立美術館



桂ゆき
怒髪天をつく

表紙作品解説

桂　ゆき

1913(大正２)年～1991(平成３)年

怒髪天をつく

1953（昭和28)年

油彩・カンヴァス　91.0×73.0　第１回現代日本美術展(1954)出品作

題が示すように、強烈な怒りの形相である。コントラストの強い色彩といい、骨太い描線といい、まさにエネルギッシュな要素に満ちた画面。とはいえそれは、いったい誰の、そして何に対しての怒りなのだろうか。しかしそういった生真面目な疑問に対しては作品は語らず、見る人を開放するその強引なユーモアが絵作りのスピードを感じさせるその表現ゆえにもたらされるとすれば、曖昧さの排除された感覚の本質的な深さを感じさせるといえるかもしれない。

よくいわれるように、桂の作品には、素材感で構成された非常に抽象的な傾向の作品群と、人や動物など、具体的なイメージを結びやすい傾向の作品群とがあり、戦後から五五年頃までのこの時期は後者に属する作品が多い。画面に合わせて題名もストレートで、「積んだり」(五一年)、「こわしたり」(五一年)、「虎の威を借りた狐」(五五年)といったふうに、それらは少なからず時代状況を反映していると考えられるものである。しかしそのことを捉えて、画家に社会風刺家的側面を読み取ることができるとしても、この作品の命は、素朴過ぎるほどのエネルギーそのものの現われといわなくてはならないだろう。

「身辺のものを衝動的に画題にしたという点ばかり多く見られるのですけれど、本当は私、身辺雑記は描きたくないし、描いているつもりはないのですよ。身辺のものを体よく処理して感覚ばかり押し出したところで、それが人のどこかを刺戟して共感を呼んでも、その意味がわからない」(『美術手帳』六八号、一九五三)と述べる桂にとって、縄目、かすり模様、新聞紙といった通常の素材を一切用いないこの作品では、逆毛立つかたちとその繰り返しが全面に表現される。それはいわば根源的な感情のプリミティヴな展開であるが、そのプリミティヴさに鬼やお不動さんといったもののイメージ、つまりまったく中性的な怒りのそれではなく、私たち周辺の邪悪を懲らすものの伝統的なイメージを見ることができることは記憶に留めたい。

美術評論家針生一郎は、桂は「ファルスに近いユーモアとファンタジーを自由に発揮するため…油絵の発表をつづけた」(『桂ゆき展』カタログ、一九九一、下関市立美術館)と述べ、戦後の美術状況で多く描かれた人間像の中でも「生活の視点」をもっていた画家だと指摘する。同氏の回顧するように、画家の戦争責任論、リアリズム論争、今泉旋風(サロン・ド・メの影響)などを経て、五六年の「世界・今日の美術展」(アンフォルメルの紹介)へと急展開を見せた時代相を併せて考えれば、桂にとってのこの時期は、戦前に自らの方法をある程度見出しながらも、その基盤をもう一度突き詰める必要に迫られた時期に違いない。そしてそのとき、生活者としての自己が浮き彫りになったことは、ある意味では当然といえる。ここでいう生活とは単に日常性の反映ということではなく、一人の人間としての桂ゆきそのものであろう。

私たちにとって重要なのは、彼女が何に怒りを感じたか、あるいは何の怒りを感じたかということより(日記のような記録的なものを探ればそれも分かるかもしれないが)、ある感情と一体となった絵画的なものの追求(誰にでも怒りを絵画化することはできる)にこのような方法で一つの回答を見出した画家の姿勢である。五六年に外国に飛び出すことで再び抽象的な傾向を強めた結果論からいえば、こうした作品は素朴過ぎたという考えがあったとも受け取られるが、むしろこの呪術的なイメージに託された感情的なものの現われに「桂的コラージュ」に共通する本質があるようである。

（高田美規雄普及課長）

怒髪天をつく　油彩・キャンバス　53×45.5cm

展覧会特集

日本絵画修復協力企画　平安－江戸の日本絵画

ホノルル美術館名品展

ホノルル美術館

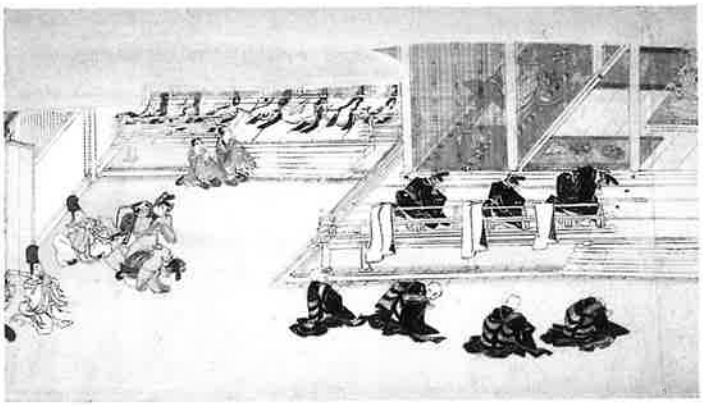
ハワイ・ホノルル美術館（Honolulu Academy of Arts）は、一九二七年クック夫人によって創立されたハワイ唯一の総合美術館である。その設立趣旨は、アメリカ・アジア・ヨーロッパの文化を受け継ぐ人々が混在しているハワイならではの美術館を建て、新しい文化を創造していこうとするものであった。現在では約三五〇〇〇点の世界各国の美術品が収蔵されており、とくにアジア関係の収集品はその質の高さに定評がある。

日本美術では浮世絵版画のコレクションが有名で、ボストン美術館・メトロポリタン美術館・シカゴ美術館・大英博物館とともに、海外五大コレクションのひとつに数えられている。また、三〇〇点をこえる肉筆の日本画についても、その一部が紹介され、高く評価されている。

しかし、それら貴重な日本絵画の保存状態については、気候の問題などがあって完全とは言い難く、長い歴史のなかで損傷を受けた作品も少なからずみられる。本展ではホノルル美術館の日本絵画の名品を展示することによって日米両国の文化交流をはかるとともに、本展の収益を同館所蔵の日本美術の修復資金にあて、日本の文化財を守ることにしている。

本展は平安・鎌倉時代から江戸時代にいたる日本絵画一〇〇点を展示し、ホノルル美術館の日本絵画コレクションのエッセンスを紹介しようとするものである。とくに肉筆日本画はほとんどが日本初公開で、国内にあれば国指定重要文化財クラスの貴重な作品が多数含まれる点でも深い意義があるものと思われる。

①


②

③

①大般若波羅蜜多経見返絵（中尊寺経）　平安時代
②弘法大師行状絵巻　鎌倉時代
③尊円法親王像　南北朝時代

④

⑤

⑥

⑦

⑧

肉筆絵画

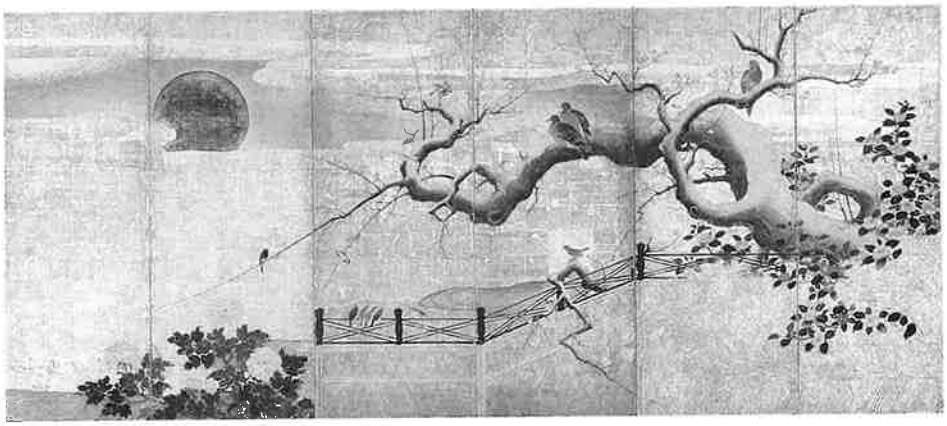
出品作品のうち、平安時代の作品は二点。いずれも平安後期装飾経の代表的遺品である「神護寺経」「中尊寺経」各一巻が出品されているが、これらはすばらしい保存状態で遺されている。

鎌倉・南北朝時代の作品は、仏画・神道絵画・肖像画・絵巻物の優品がそろっている。仏画では「地蔵菩薩来迎図」「十六羅漢図」といった優れた作品があり、神道絵画では正面向き単独の「丹生明神像」の作例や、社殿の前に本地仏の立像を大きく描き込んだ「春日曼荼羅」など、極めて希少価値の高い作品がある。さらに肖像画では南北朝時代の高僧像「伝尊円法親王像」があり注目される。そして絵巻物においても海外にある鎌倉時代の大和絵としては最も有名かつ重要な作品である「弘法大師行状絵」一巻をはじめ、「法然上人伝法絵」「神於寺縁起」や白描「北野本地絵」のそれぞれ重要な断簡三幅があって質の高い内容となっている。

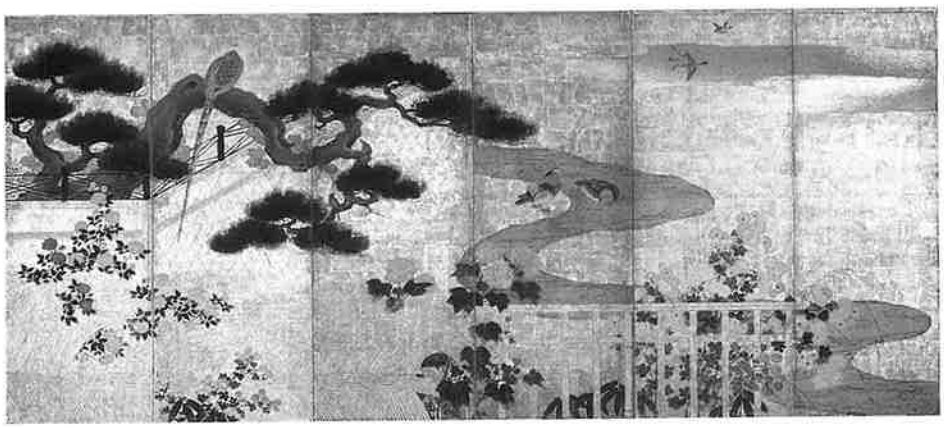
室町時代の作品では絵巻物が充実している。「是害房絵巻」の優品や、国宝「鳥獣人物戯画」の良質な転写本、珍しい巻子本の「那智参詣曼荼羅」があって、眼をひく。また、ただ一点の室町水墨画である伝周文筆「山水図」は、周文をさほど下らぬ時期の山水画の様式を伝える貴重な作例である。

出品作品の大半を占める近世絵画にも貴重な作品が多数含まれている。狩野派・琳派・南画・文人画・肉筆浮世絵などバラエティに富んだ作品群は、世界でも屈指のコレクションである浮世絵版画のコレクションから選ばれた浮世絵の神

⑨



⑩



⑪

④春日曼荼羅　南北朝時代
⑤伝周文　山水図　室町時代
⑥椿椿山　蔬果魚貝図　江戸時代
⑦是害房絵巻　室町時代
⑧尾形光琳　紅梅図団扇　江戸時代
⑨伝狩野永徳　老松桜図　桃山時代
⑩狩野興以　花鳥図（右隻）　江戸時代
⑪狩野興以　花鳥図（左隻）　江戸時代

髄とも呼べる作品群とあわせて、まさに豪華なラインナップとなっている。

例えば狩野永徳の作と伝える「老松桜図」や狩野興以の代表作としてよく知られる「花鳥図」、狩野尚信の「職人尽図」、池大雅の「山水図」、椿椿山の「漁楽図」などの日本絵画の花ともいえる屏風絵が十八隻展示されるさまは壮観である。

また宗達工房の版下絵に本阿弥光悦が揮毫した「倭漢朗詠集書巻」や尾形光琳の「紅梅図団扇」などの近世大和絵系作品や、桃山時代ころの作例として現存最大級の「天神像」、狩野宗秀の有名な「洛中洛外図扇面」など、それぞれ極めて優れた作品である。

さらに、文人画系では貫名海屋の代表作「雲泉秋景」をはじめ、五点というまとまった数で展観される椿椿山の作品群、ことに「蔬果魚貝図」などが注目されるところである。

加えて、肉筆浮世絵も素晴らしい。わずか三点ではあるが、鳥居清長の代表作「女三人上戸図」や懐月堂安度と歌川豊国のいずれも華麗な美人画は肉筆浮世絵の美しさを堪能させてくれる。

浮世絵版画

ホノルル美術館の浮世絵は世界的コレクターであるミッチェナー氏による大量かつ高水準の作品の寄贈によってまさに世界でも屈指のコレクションとなった。日本でもこのコレクションは有名で、機会あるごとに日本での展観が催されてきた。

今回の展示作品四八点は、そうした優れた作品群から初期浮世絵の名品と、いわゆる六大浮世絵師である鈴木春信・東

⑫

⑬

⑭

州斎写楽・鳥居清長・喜多川歌麿・葛飾北斎・歌川広重の作品から数点ずつを選んで、まさに浮世絵のエッセンスを紹介する構成となっている。

初期浮世絵では、墨刷絵・丹絵・紅絵・漆絵などの優作が十数点並んでいる。世界で一点しか存在が確認されていない鳥居清倍の「金太郎と熊」や、奥村政信の「朝鮮使節来朝行列図巻」などの珍しい作品をはじめ、同じく政信の浮絵の作例などがあって、初期浮世絵のバリエーションを概観できる。

六大浮世絵師の作品ではいずれも初期的な刷りのものを中心にしつつ、極力代表作を含めるかたちで数点ずつを展示して、各々の作家の優れた個性を感得できるよう配慮されている。しかもほとんどが極めて良い保存状態の作品であり、制作当初に近い美しい色遣いや微妙なぼかしなどを十分に鑑賞することができる。

なかには歌麿の両面刷りの作例「高島おひさ」、一般に知られるのと別バージョンの「ポッピンを吹く娘」などの珍しい作例や、多数現存する北斎の有名な作例「富嶽三十六景」・広重の「東海道五十三次」でも最も早い時期の刷りと考えられるものなどが含まれ、贅沢な浮世絵鑑賞の場となっている。

日本絵画修復協力企画

今回の企画は南の島に大事に保存されている日本の文化遺産を紹介し、そのよりよい保存のための協力を仰ぐ意味がある。この展覧会には、展覧会開催に備えて修復された七件の作品が含まれている。そして今後もホノルル美術館の作品修復は継続されていくと聞いている。

もともと、この展覧会は静岡県立美術館および静岡新聞社が、ホノルル美術館から日本への修復協力の呼びかけに答えるかたちで企画し、その後当館も含めた巡回各館のスタッフによる綿密な現地調査を経て実現したものである。

調査では日本の研究者の恐らく誰もが知ることのなかった作品をも実見し、作品の価値と損傷の度合いを検討した。そして重要度と損傷度からみて優先すべき作品から修復に着手し、展観にこぎつけたのである。いわば日本とハワイの協力関係の結実として、展覧会の開催と作品修復が実現した幸せな展覧会であると思う。

日本人観光客の多いハワイだが、ホノルル美術館を訪れるひとは多くないという。日本の貴重な文化遺産を守る努力を続けるホノルル美術館の存在。海外で日本文化を紹介し、保存していこうとする困難な事業に取り組む姿を知る人が、この展覧会によって少しでも増えていくことを期待している。（福島恒徳研究員）

⑫葛飾北斎　富嶽三十六景　凱風快晴　江戸時代
⑬歌川広重　東海道五十三次　蒲原夜之雪　江戸時代
⑭喜多川歌麿　婦人相学十体　ポッピンを吹く娘　江戸時代

日本絵画修復協力企画
ホノルル美術館名品展
平安～江戸の絵画
平成八年二月二〇日（火）
～三月三一日（日）
主催
山口県立美術館／テレビ山口／毎日新聞社／ホノルル美術館名品展日本実行委員会

大英博物館

アッシリア大文明展―芸術と帝国

大英博物館コレクション　再び山口へ

さる、一九九一年、当館で《大英博物館―芸術と人間―展》を開催し、たいへんな好評を博したのを覚えておられる方は多いだろう。これは大英博物館の所蔵品から名品を選りすぐり、メソポタミア・エジプト・ギリシア・インド・西域・メソアメリカ・ポリネシアの世界七地域の芸術を紹介する総合的な展覧会だった。

そして、再びこの山口で、大英博物館の所蔵品による展覧会が開かれる。この《アッシリア大文明展》は、前回の展覧会の第一部にあたるメソポタミア文明の集大成ともいえるアッシリア帝国の芸術・文化を紹介する展覧会である。大英博物館所蔵のアッシリア美術は、世界最高水準のコレクションの一つである。本展覧会の展示品は浮彫や象牙細工、楔形文字板など総点数約二五〇点にもなるもので、その大部分がこれまで門外不出のものである。メソポタミア文明の展覧会としては、これまでにない規模と水準の大展覧会である。

アッシリアの歴史

「メソポタミア文明」は、世界四大文明のひとつとして、よく知られている。しかし、この展覧会で紹介される「アッシリア」という国の名前は、日本ではそれほどなじみがないかもしれない。

アッシリアは紀元前一九〇〇年頃から歴史に登場した。メソポタミア文明の中心地は南方のバビロニアの都市文明であったが、これに対しアッシリアの都アッシュールはイラク北部のティグリス河流域にあり、トルコやバビロニアなどの地域との中間地点にある商業都市として発展した。この時期を古アッシリア時代という。

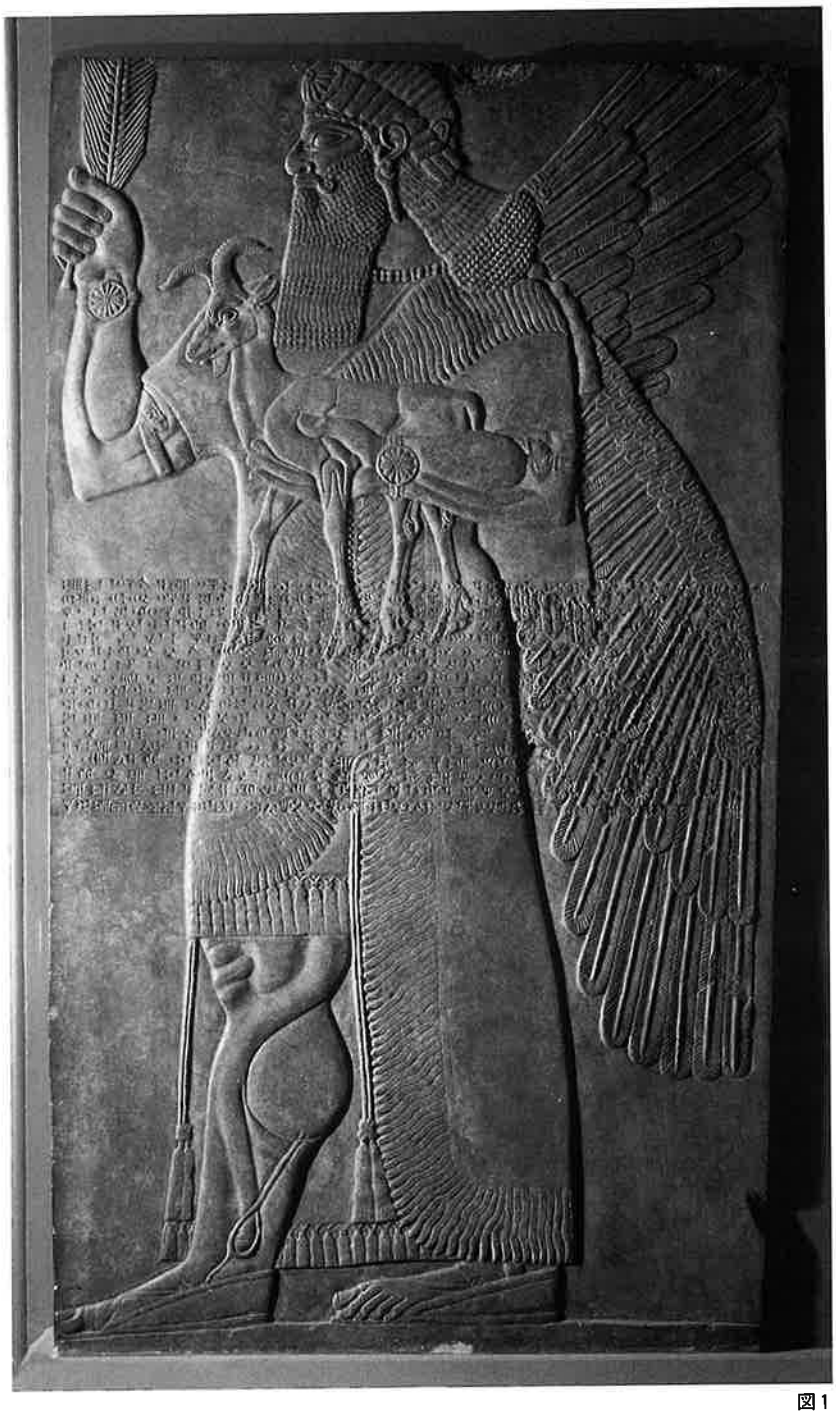
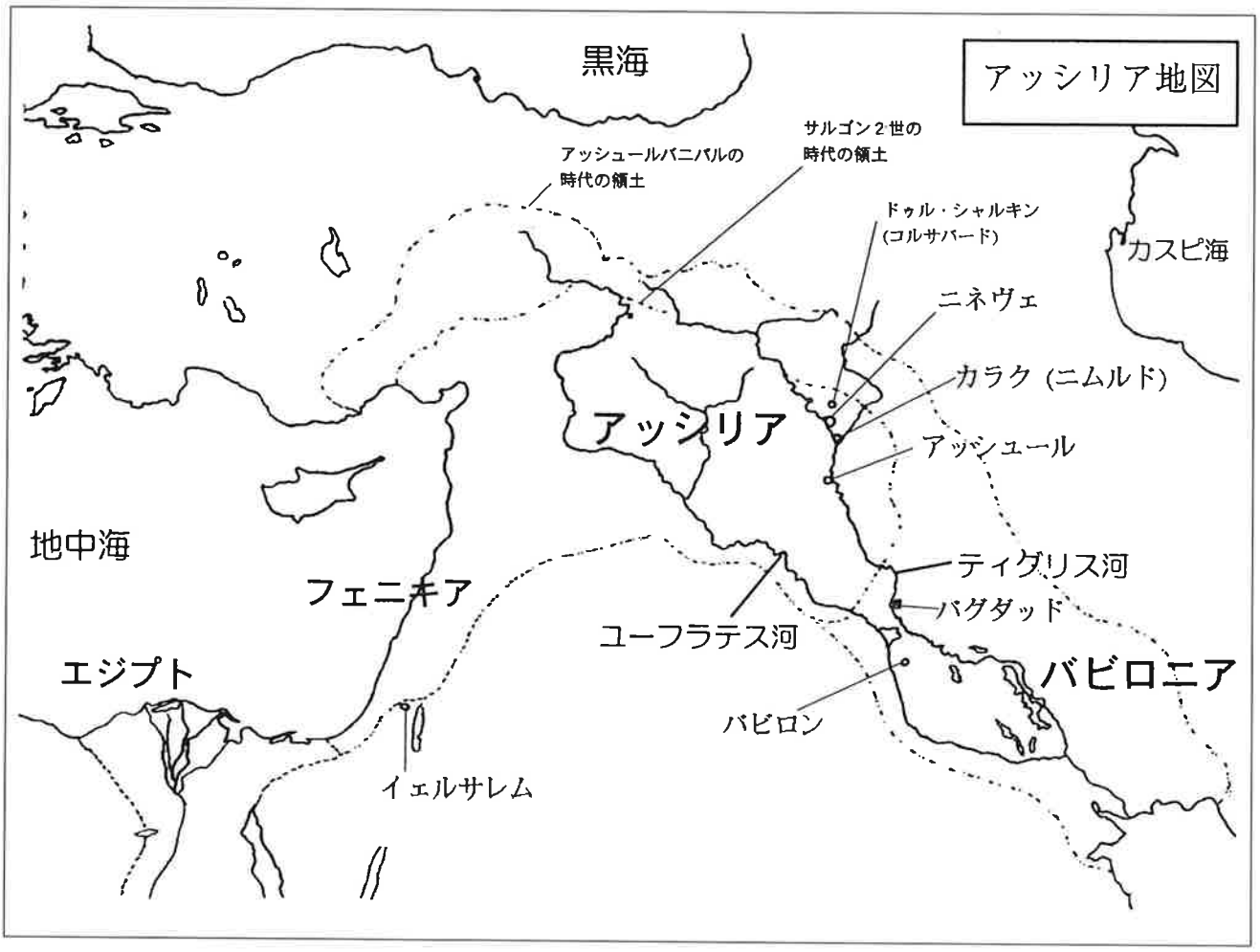


図1


アッシリア地図
黒海
カスピ海
サルゴン2世の
時代の領土
アッシュールバニパルの
時代の領土
ドゥル・シャルキン
(コルサバード)
ニネヴェ
カラク (ニムルド)
アッシュール
アッシリア
地中海
フェニキア
ティグリス河
バグダッド
ユーフラテス河
エジプト
バビロニア
バビロン
イェルサレム

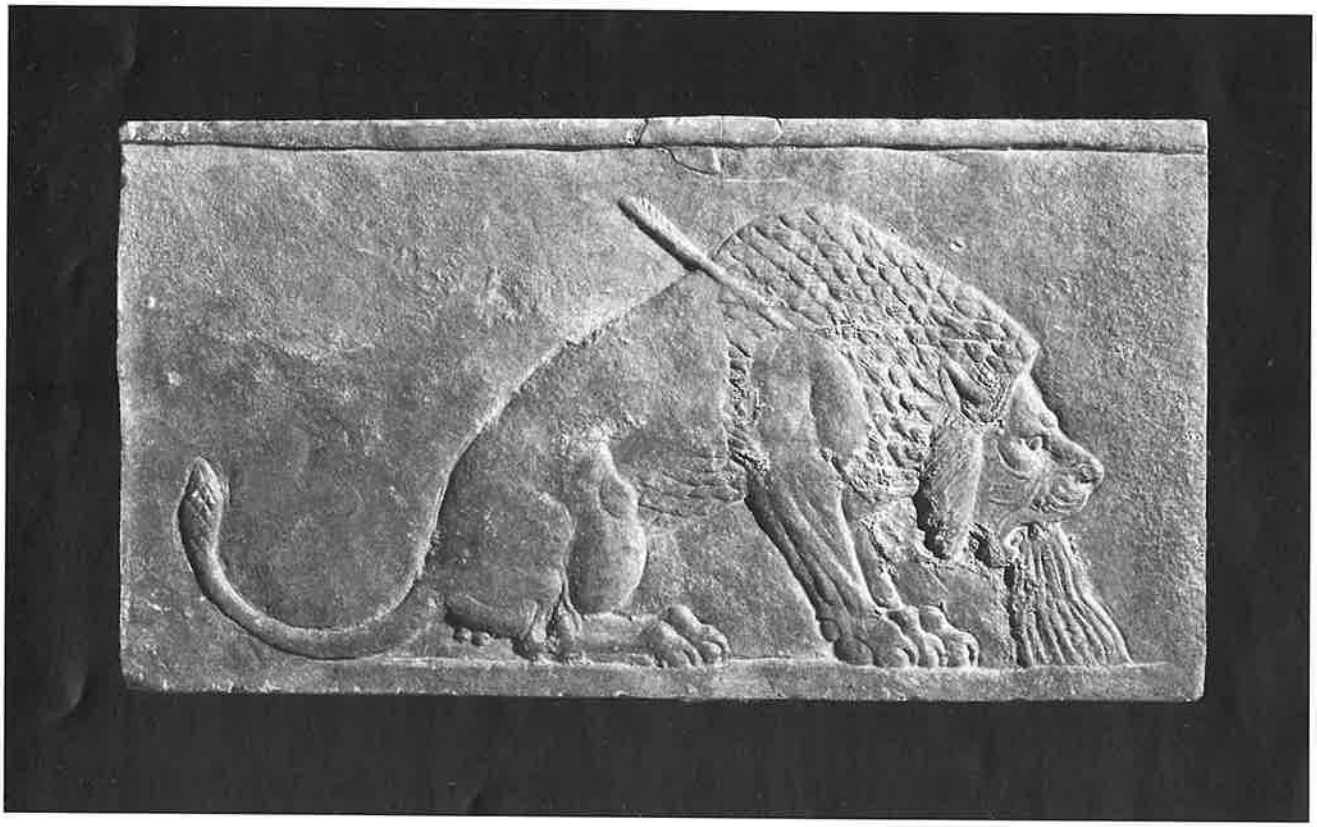


図2

図3

図4

図1　守護精霊　紀元前875―860年頃　ニムルド出土
図2　瀕死のライオン　紀元前645―640年頃　ニネヴェ出土
図3　彩釉壁面装飾板　紀元前875―865年頃　ニムルド出土
図4　スフィンクス　紀元前9―8世紀　ニムルド出土

会　期　4月13日（土）～6月2日（日）月曜休館。
ただし4月29日（月）、5月6日（月）は開館。
4月30日（火）、5月7日（火）は休館。
入場料　一　般　1100（900）円
高大生　800（600）円
小中生　500（300）円
（　）内は前売り、または20人以上の団体

古アッシリア時代にはアッシュールの周辺地域の領土だけだったアッシリアは、前一四〇〇年頃から次第に勢力を強め、領土をユーフラテス河流域にまで拡げる。この時期を中期アッシリア時代といい、アダド・ニラリ一世（一三〇五―一二七四BC）、シャルマネセル一世（一二七三―一二四四BC）、トゥクルティ・ニヌルタ一世（一二四三―一二〇七BC）の各王の治世下に全盛期を迎える。

しかし、これらの王の治世の後、アッシリアは自然環境の悪化による国力の低下や周辺地域の牧畜民族の侵入などの理由で、領土は縮小してしまう。

しかし、前九世紀から七世紀にかけて、アッシリアの王たちは、遠征を繰り返し行って領土を再び拡大し、最初の世界帝国として中近東全域を支配する。この時代を後期アッシリア時代あるいは、新アッシリア時代という。

アッシュールナシルパル二世（八八三―八五九BC）は、首都をアッシュールからカルフ（現在のニムルド）に遷都し、大規模な建築の造営を行った。この地は、それまでの首都アッシュールと、それに次ぐ重要な都市であったニネヴェの間に位置している。都市の造営は後を継いだシャルマネセル三世（八五八―八二四BC）の時代まで続き「シャルマネセルの城塞」と呼ばれる建物が作られた。

さらにティグラト・ピレセル三世（七四四―七二七BC）、シャルマネセル五世（七二七―七〇五BC）、サルゴン二世（七二一―七〇五BC）の三人の王の治世の間、アッシリアの勢力はペルシア湾から地中海沿岸にまで拡大し、その周辺諸

図5

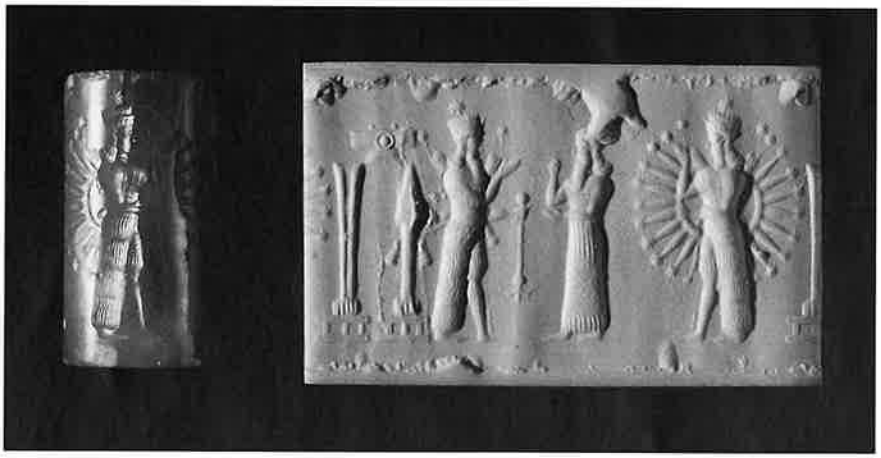


図6

図5　皿　紀元前9－8世紀　ニムルド出土
図6　円筒印章　紀元前729－700年頃
図7　楔形文書：法律用語の対訳表　紀元前7世紀
ニネヴェ出土

国も従えるようになった。

サルゴン二世は、首都をニネヴェの近郊のドゥル・シャルキン（現在のコルサバード）に遷都し、センナケリブ（七〇四－六八一BC）は、ニネヴェに遷都し、それぞれ壮大な建築を建立した。

アッシリアの黄金時代といわれるのは、これらの王の後のアッシュールバニパル（六六八－六三一BC）の治世の時である。領土は最大となり、宮殿の浮彫がつくられ「アッシュールバニパルの文書庫」に大量の楔形文字の文書が収集され、文化・芸術の面でも繁栄した時代であった。

しかし、アッシリアはアッシュールバニパル王の時代以降急速に衰退する。何度も行われた軍事遠征による経済的な疲弊や、官僚制の横行と王権の弱体化、被征服地域や周辺諸国の反抗などが原因である。そして、新興国の新バビロニアとメディアの連合軍によって紀元前六一二年首都ニネヴェは陥落し、アッシリアは滅亡した。

アッシリアの歴史は、軍事力による領土拡張の歴史であり、アッシリア人による破壊・残虐行為や過酷な貢納賦課、強制移住など、軍事帝国としての悪評も高い。しかしながら、アッシリア帝国による西アジア一帯の統一は、言語や文化の複合化・統合化をもたらし、その後何世紀にもわたって受け継がれた。アッシリアの芸術・科学・文学・技術は、メソポタミア文明を総合した頂点ともいえ、それは東洋・西洋の文化に多大な影響を及ぼす大きな遺産として残ったのである。

日本には、西アジアの文化がシルクロード・中国を経て奈良の正倉院などに

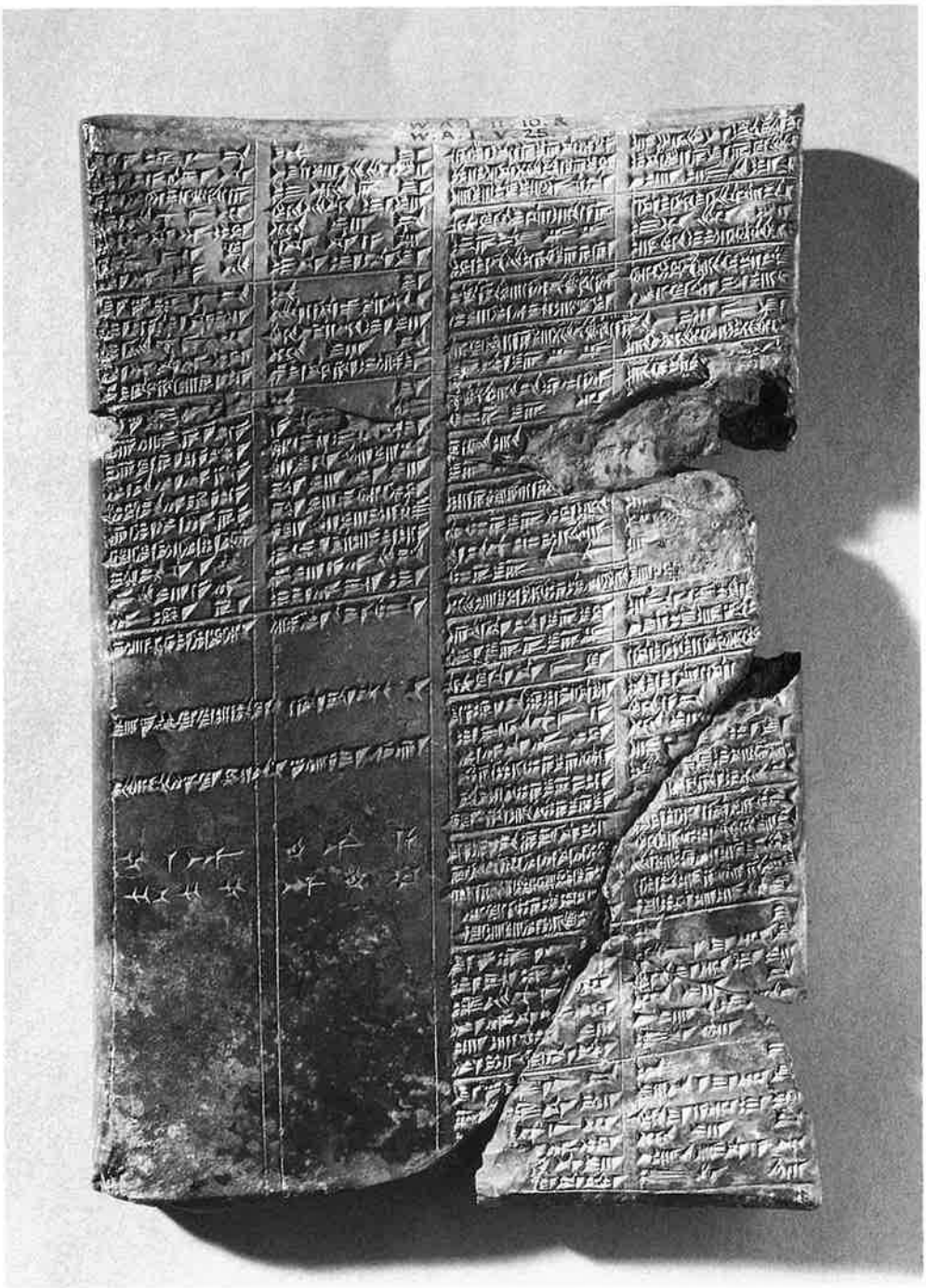


図7

伝えられていることはよく知られている。日本の獅子・狛犬・唐草・葡萄などわれわれがよく目にするモチーフに、西アジア起源のものは多く、アッシリア美術にあらわれたメソポタミア芸術の伝統は、日本美術にも影響を与えている。このような観点から見てもこの展覧会はまことに意義深いものだといえる。

よみがえる芸術と帝国

大英博物館のアッシリアコレクションの多くは、一九世紀半ば、イギリス人レヤードの発掘によって、大英博物館にもたらされた。今回の展覧会では、アッシリアの歴史上、世界帝国として大きな覇権を持った新アッシリア時代の遺品を中心に紹介する。新アッシリア時代の遺品が、メソポタミア時代の芸術のなかでも優れたものが多く、石彫や浮彫など壮大なものが多い。一方で象牙細工や印章など細かいものにも優品があり、当時の芸術の水準の高さがうかがえる。

浮彫彫刻(図1・2)

アッシリア歴代の国王の宮殿の壁面は、有翼の守護精霊やライオン狩り・雄牛狩り、そして戦闘の場面などを描いた石(アラバスター)の浮彫で飾られていた。とくにライオン狩りのモチーフは、王の強さと威厳を象徴し、帝国主義的な国家体制のプロパガンダの役目を果たしていた。動物や人の顔が真横向きに描かれるなど図式的だが、細部まで繊細に表現され、力のみなぎった迫力のある造形をあらわす。浮彫彫刻はこの展覧会一番の見どころである。

建築装飾(図3)

アッシリアの宮殿は日干しレンガで作られそれに石の浮彫やテラコッタの装飾板などをはめ込んで装飾した。テラコッタの装飾には、パルメットやザクロなど、後に東アジアにも伝播する文様が多く表されている。

工芸品（図4・5）

ニムルドから多く出土しているが、アッシリア以外の地域の影響のつよいものが多い。例えば象牙の浮彫や青銅製の皿にあらわされるスフィンクスは、明らかにエジプトの影響である。このような、他地域の影響がみられる作品は、戦利品や貢ぎ物としてアッシリアにもたらされたもので、これはおそらくエジプトの影響を受けたフェニキア人の職人の手によるものと考えられる。

円筒印章（図6）

ローラー状になっており、一回転させると粘土板に型が押されるようになっている。印章のほうに凹彫りされた部分が捺した側には浮彫になる。王や神の像などが刻まれる場合が多い。写真の円筒印章には、3体の神が刻まれるが、とくに右側の神は仏像のように光背が描かれているのが興味深い。

楔形文書（図7）

メソポタミア文明の地域では、くさびのような形を組み合わせた楔形文字を粘土板に刻んで文書とした。本展覧会では、呪術、文学、語学から法律的な契約書や納品リストまで、当時のアッシリア社会を物語る文書を多く紹介する。

また、このほかに一九世紀のアッシリア発掘当時の資料も紹介する。

（岩井共二当館学芸員）

美術館から

これからの展覧会

平成八年度の特別展

平成八年度には、左記の特別展の開催を予定しております。これらのうち当館の自主企画は、〈明治日本画の新情景〉展と〈ウーライ展〉です。多数のご来館をお待ちしています。

アッシリア大文明展
　四月一三日～六月二日
法隆寺金堂壁画展
　六月一四日～七月一〇日
カミーユ・クローデル展
　七月一九日～八月一八日
伝統工芸新作展
　八月二八日～九月八日
第五〇回山口県美術展覧会
　九月二六日～一〇月一三日
第四九回学校美術展覧会
　一一月二八日～一二月一日
明治日本画の新情景
　一二月二〇日～一月二六日
二紀会展
　二月一日～二月九日
山口大学卒業制作展
　二月一三日～二月一六日
山口芸術短期大学卒業制作展
　二月二〇日～二月二三日
ウーライ展
　三月四日～三月三一日

平成八年度の常設展

平成八年度の常設展示予定は次のとおりです。都合により展示内容が変更される場合もあります。

第一常設展示室

絵画展示室（香月泰男室）

シベリア・シリーズⅢ
　～四月二一日
シベリア・シリーズⅠ
　四月二三日～七月二八日
シベリア・シリーズⅡ
　七月三〇日～一一月四日
シベリア・シリーズⅢ
　一一月六日～二月一日
シベリア・シリーズⅣ
　二月四日～

絵画展示室（小林和作室）

桂ゆき展
　～四月二一日
近年収集の館蔵品展
　四月二三日～七月二八日
小林和作の世界
　七月三〇日～一一月四日
戦後日本画の変革
　一一月六日～二月二日
松澤宥展
　二月四日～

郷土工芸室

古萩と現代
　～四月二一日
三輪龍作展
　四月二三日～七月二八日
萩の茶陶
　七月三〇日～一一月四日
現代の萩焼
　一一月六日～二月二日
現代の陶芸
　二月四日～

資料展示室

今井寿恵の写真
　五月一二日
ウィン・バロックの写真
　五月一四日～七月七日
アンセル・アダムスの写真
　七月九日～九月一日
トマス・シュトルートの写真
　九月三日～一一月四日
戦後日本画の変革
　一一月六日～二月二日
松澤宥展　二月四日～

第二常設展示室

雲谷派の系譜
　一〇月二九日～一二月一五日
雪舟展
　一〇月二九日～一一月一〇日

山口県立美術館ニュース「天花」　第六四号
平成八年三月三一日発行
発行　山口県立美術館
〒753 山口市亀山町三－一
☎〇八三九－二五－七七八八
FAX〇八三九－二五－七七九〇
印刷　瞬報社写真印刷株式会社